

女の子は森へおつかいに

女の子はあまり森へは出かけない。なぜかと考えると、その理由はすぐに思いつく。そう、女の子にとって森は危険だからだ。逆に男の子は、危険だからこそ森に出かける。強くあるべき男の子と、襲われる危険を意識する女の子の違いは、現代でも厳然と存在している。

そういうわけで昔話の世界にまでさかのぼると、森へ行った女の子がけっこういるのではないか。わたしたちの頭にまっ先に浮かぶのは、あかずきんだろう。あかずきんは日本でも親しまれ愛されている昔話で、日本製の絵本も数が多い。^(注)あかずきんが森へ行った理由は、母親に頼まれて、病気のおばあさんにお見舞いを届けるためだった。そう、

女の子はむやみと森へ行ったりしないが、おつかいがあれば出かけていく。おつかいというのは、ひとつにはとり組むべき課題であり、もうひとつは母親との強いつながりを示唆している。筆者は、あかずきんから始まる女の子の冒険の典型として「おつかいに行く」を提



(図2 『はじめてのおつかい』福音館書店 表紙)

案したい。

では、おつかいに行った女の子の絵本を二冊とりあげよう。『はじめてのおつかい』(筒井頼子作、林明子絵、福音館書店、一九七六年)(図2)のみいちゃんは非常にかわいらしく、もう一冊の『ゆうかんなアイリーン』(ウィリアム・スタイグ作、おがわえつこ訳、セーラー出版、一九八八年)(図3)のアイリーンは一見不細工に見えるが、実は魅力に満ちている。そして、みいちゃんとアイリーンには、共通点がある。みいちゃんを見ると「赤いスカート」をはいている(文章では言及されていない)。アイリーンのほうは「赤いぼうしに 赤いマフラー」を身につけた、と書かれていて、絵を見ると、てぶくろも赤いことがわかる。赤は画面に明るい印象を刻んでいるし、ふたりの決意を表現するのにふさわしい強い色でもある。だがそれだけでなく、あかずきんの「赤いずきん」とつながりがあると



(図3 『ゆうかんなアイリーン』セーラー出版 表紙)